

元学部留学生のライフストーリーからみる進路決定に関わる重要な要因
IMPORTANT FACTORS IN CAREER CHOICES AS SEEN BY THE LIFE STORIES
OF FORMER EXCHANGE STUDENTS

久野弓枝, 札幌大学
Yumie Kuno, Sapporo University
中谷潤子, 大阪産業大学
Junko Nakatani, Osaka-sangyo University

1. はじめに

2008年に政府により「留学生30万人計画」が提出され、留学生の日本国内での就職、グローバル人材の育成が求められるようになった。それに伴い、日本語教育の世界でも就職支援を目的としたビジネス日本語教育に関する研究が盛んに行われるようになってきた。

しかし、「平成25年度外国人留学生進路状況・学位授与調査結果」によると、日本国内で就職した学部留学生の割合は3割弱であり、政策に後押しされるように行われている教育実践や研究が十分に成果を上げているとは言い難い状況である。国の構想に依拠した教育実践を再度、検討する必要があると筆者らは考える。そのためには、学部留学生がどのように就職活動を行い、進路決定を行っているのか、を詳細に検討する必要がある。そこで本稿では元学部留学生の進路決定に至るまでのライフストーリーを描き、何が進路選択のための要因となりうるのかを分析し、日本語教員として何ができるのか、を考察する。

2. 先行研究

学部留学生の進路に関わる研究は大きく2つに分類できる。第一にビジネス日本語教育に関する研究である。これらの研究ではビジネス日本語講座修了生に対する追跡調査(深川・島・太田, 2014)やビジネス日本語のシラバス構築のための研究(堀井, 2012・2013)などがある。また、近年では就職後に必要なビジネス日本語教育に関する研究だけではなく釜淵(2015)・三宅(2015)のように就職準備教育としてのビジネス日本語教育研究も行われている。これらの研究は日本での就職を考える留学生の日本語能力を向上させるために重要な研究であると言える。しかし、当事者である留学生の将来像を捉える視点が十分検討されているとは言い難い。一方、当事者である留学生の視点を捉えるために留学生のライフストーリー研究が行われている。三代(2013)・(2014)ではビジネス日本語研究における「文化」の捉え方の危うさを論じ、頻繁に用いられる「グローバル人材」というアイデンティティを本質化しないことが重要だとしている。また、中山・佐藤(2014)では、進路選択にはいくつもの自己の中での調整が必要だとしている。さらに、久野(2015)では、留学後の問題を乗り越えていくプロセスを明らかにし、留学中の問題を解決するためには、「重要な他者の存在」、「居場所」が重要だと述べている。これら

のライフストーリー研究では、個々の留学生が進路を決定していく際におけるアイデンティティ交渉の詳細が描かれており、留学生の心理的側面を理解する上で重要である。しかし、進路を決定する要因となりうるものは何か、については明らかにされていない。進路決定は青年期の成長において非常に重要である。この重要な時期に日本語教員として何ができるのかを具体的に考えるためには、抽象的な概念で留まるのではなく今までの研究を掘り下げて進路決定要因について検討していく必要があると考える。

3. 研究方法と調査概要

3.1 ライフストーリー研究

本研究はライフストーリー法を用いて行った。ライフストーリー研究とは現在に至るまでの経験のプロセスを物語る行為+語られた物語の研究である（やまだ、2000a・2000b）。分析方法は調査協力者のどのようにして存在するのかを出来事と出来事の間接関係を探っていく（Polkinghorne,1995）を参考にした。

3.2 調査概要と調査協力者

中国南部出身の2名の女子大学生（以下、AさんとBさん）に半構造化インタビューを2回行った。調査協力者はインタビュー時に地方私立大学文系学部の4年生であり、日本企業に就職を決めている。Aさんは日本の大学に3年次から編入しており、Bさんは1年次から日本の大学で学んでいる。

1回目のインタビューは進路が決定する前に行い、2回目は進路決定後に実施した。インタビューはICレコーダーに録音し、その内容をすべて書き起こした。インタビューは日本語で行った。

4. Aさんのストーリー

4.1 Aさんのストーリー

Aさんは中国南部の都市出身で、家族は両親と2歳年上の姉と1歳年下の弟との5人である。日本語に触れたのは大学で日本語学科に進んでからである。フランス語かドイツ語を学びたかったが、入学した大学では英語学科と日本語学科しかなかったため日本語を選択し、日本語能力を向上させるために、3年次から提携校である日本の私立大学に編入した。日本の大学に編入後はセミ選択などで問題を抱えた時期もあったが、周囲のサポートを得ながら問題を乗り越えてきた。

4.2 大学院か就職かで迷う

Aさんは進路を決めなければならない時期になり、大学院に進学をするのか、日本で就職をするのか、悩んだ。なぜなら学生の身分のままでいたかったからである。社会人になると厳しく今のような自由な生活は送れない。また、将来、新聞社で社説を書きたいという希望もあった。しかし、家族とゼミの教員に相談したところ、家族からは経済的に援助をするのが難しいと言われ、ゼミの教員からは「留学生だ

から語学を生かした仕事につくように勧められた。Aさんは親からの自立と日本に残りたいという思いが強かったので、大学院進学を諦め日本で就職する方向で動くことにした。

A お金のほうも心配しなくていいですし、それで、一応、就職のほうを選びました。自立したいし、絶対、日本に残りたかったですし。

4.3 希望する業界が決まる

Aさんは大学生活で国際交流サークルのリーダーをしていた。サークルのリーダーをするまでは自分の居場所をなかなか見つけられず悩んだ時期もあった。しかし、サークル活動を通じて自分の興味、関心について気づいた。

A 国際交流サークルで日本人学生と留学生との交流でBBQを企画して、自分は企画をしたり計画を立てるのが好きだと分かって、自分も旅行できるし。

4.4 就職活動を始める

具体的に働きたい業界も明確になり就職活動を始めようとしたが、どういう基準で内定をもらえるのか、どのような準備をしたらいいのか、分からず就職活動を開始することができなかった。Aさんはすでに4年生になっており、他の学生と比べると就職活動に「乗り遅れている」と感じていた。しかし、夏休みに行ったリゾートホテルでのインターンシップが就職活動に真剣に取り組めなかった彼女を変えた。彼女はインターンシップを通して「いい友達に出会い、どんなに苦しくても支え合う人がいたらやっていける」と確信した。また、今まで就職先としてホテル業界を選択肢に入れていなかったが、「このインターンシップの経験を活かしたい」と思うようになった。彼女の就職活動を支えたのはキャリアサポートセンターであった。キャリアサポートセンターでは複数の職員が彼女の就職活動をサポートした。その結果、タンさんは就職活動に必要な知識を身に付け、過酷な就職活動を継続することができた。

A キャリアサポートセンターから情報を得て、合説に行ったりして、履歴書を書いたりして、何か一歩、一歩進んでいました。面接のマナーが良く分からなかったので練習しました。女性の先生は悪いところをきちんと教えてくれて、男性の先生は自分の良いところを言ってくれました。

Aさんは就職活動を進めるうちに、旅行業界、ホテル業界の他に人材派遣会社にも関心を持ち就職活動を行っている。なぜなら、多くの留学生が彼女と同様に就職活動で苦しんでいたからだ。就職活動を進めていくうちに「留学生であるからできること」、「他の人のお手伝いをしたい」という気持ちが強くなっていったからだ。

しかし、内定を得ることはできなかった。内定を得られなかったのは「ここで働きたいという気持ちが強すぎて」、自分自身を出せなかったからだと言う。

4.5 内定先4社から1社を選ぶ

Aさんは最終的に3社のホテルと1社の旅行会社から内定を得ることができた。なぜ4社から内定を得られたのか。Aさんは「自分では分からないが就職活動をしているうちに自然と笑顔が出せるようになり会社がどのような答えを求めているのかが分かってきた」と言う。彼女は最終的に女性のリーダーが多く活躍している大手ホテルに就職を決めた。なぜなら、大手企業であるため、将来転職に有利であると考えたからである。また、女性のリーダーが多いので、自分の将来像を形成しやすかった。それに対して、第一志望であった旅行会社は中小企業であり、彼女の担当エリアは中国であった。そのため、彼女は転職する際にも、日本語能力を向上させるにも、有利にはならないと感じた。

5. Bさんのストーリー

5.1 日本での就職に向けて

Bさんは、中国南部の都市出身で、家族は両親のみの一人っ子である。母親も働いており、Bさんは、大学を卒業したら働いて自立することが当たり前として念頭にあった。結婚を否定してはいないが、自立していないのに結婚が先に来るなど考えられなかった。

そして、幼いころより、日本のアニメやJ-POPに憧れ、それが高じて留学したBさんにはもともと卒業後も日本で働きたいという意思があった。一人っ子であるため、将来的には親のことなども心配ではあるが、就職活動を始めるときには、日本社会の一員として働いている自分のイメージをもつようになる。

B そ、アルバイト先でもわりと日本人の考え方とか、昔もジブリとか好きだったんですけど、考え方とか、その。自然を守るとか、そういう、その人を理解するとかそういうところが、ま、ま、向こうでは、自分は感じられなかったの、日本で、会社で働いて、そういうものをまた感じれたらって感じで。就職したいです。

中国にいたときから日本社会で働こうとは思っていたが、日本で生活することで、就職へのイメージはビジネス社会にいる自分のイメージというよりは、自然を守る、相手を尊重するなどの日本社会の規範や秩序の中に自分も身を置くということの体現を望んでいるといえる。

また、留学先の大学のある現在の居住地について非常に好意的である。その土地が気に入っている理由は人の温かさだ。

Q そういう、その、〇〇の気質みたいなのは、中国と比べたらどうなの？中国とか、まあ B さんの故郷。

B 私のところも多分日本と似てる感じ。都会の人は、皆ちょっと冷たくって、田舎の人は親切。で、私のところはその真ん中ぐらいなので。

Q そういう意味でも〇〇の感じが何かちょうどいいような感じ？

B ちょうどいい。

人の温かさは、自分の出身地とオーバーラップする部分があり、そこに居心地の良さ、快適さを感じている。B さんは、中国でも地方によって文化や習慣、様々な面において差があると強く感じている。日本で同じ中国からの留学生と話していても、その出身地の違いから、考え方の違いなどを強く感じたことが何度もあった。それに比べて、日本の現在の居住地のほうが違和感がなく、就職してもこの地域に居続けたいと思っている。

また、仕事をするということに関しては、モデルとなる存在が大きい。大学時代、最も長くアルバイトをしたのが焼き鳥屋だった。そこでは、アルバイト仲間だけではなく、社員もいた。中でも女性社員が B さんに「働く」ことについて大きな影響を与える。

B その先輩のほういろいろ関わってくれて、先輩方のほうが忙しいんですけど笑ってて、その、半年に1回その一焼き鳥屋でみんなで作る行事あるんですけど、そういうとこいったら、私1回生か2回生の秋に始めたんですよ。確か。そして入って2週間後にその行事があって、まだわけわからなくて、でも行ったら、先輩たちが、なんか泣いたりとかして、

Q 笑)

B 感動しちゃったっていうのはあって。お互いに頑張ってる喜びも悲しみも、忙しいときもそうじゃない時も。

Q 話してるうちに感動したって。

B 何か、部活みたいに。

Q 熱いんだね。

B 熱い、熱かったです。

Q あ、じゃあそういうの見ていいなあって？

B いいなあって。で、それまで日本人の女性のイメージって言ったら、優しいイメージで。そういうのはあんまり自分にはなかったんです。

社員女性が、仕事について熱く語り泣いている姿は、B さんがそれまで持っていた日本女性のイメージとは異なるものだった。しかし、B さんは、どんな時も仕事に対して熱く取り組む姿勢を日本の女性が持っていることに驚くと同時に、それを非常に肯定的にとらえる。ひいては、出身地での男女の対等な姿、働く母親の姿と

重なり、日本での就職活動へイメージを固めていくことができたといえるのではないだろうか。

5.2 就職活動そして内定

Bさんは、成績もいいうえに、授業とアルバイトのバランスを考え、自己管理もできるいわゆる「優秀な」学生である。就職活動をするにあたり、キャリアセンターにも足しげく通い、着々と活動を進める。キャリアセンターは、多くの大学のセンターがそうであるように、利用する学生に対して何かと親身に相談に乗ってくれる。一人っ子のBさんに対しても、将来的に親を中国から日本へ呼び寄せるという選択肢もあるなどのアドバイスもあった。さらに、なかなか就職が決まらないBさんに対して、子どものようなボブヘアがネックになっているのではないとまで言われた。あまりにも色々なことを言われているうちにそれがプレッシャーとなり、キャリアセンターに行くのが嫌になったこともあった。

また、自分が大学の中では「できるほうだった」ことを自覚していたが、就職活動で上には上がいることを思い知ることになる。

B セミナーみたいのに行ったときに、国立の人がすごい多くて、で、そこで初めて、今まで友だちとかもわりと、同じ学校だったりとか、アルバイト先も日本人の学生さんおったんですけど、ま、私立の人が多かったし、ま、皆学校行きながら、遊び半分で作ってる人が多かったんですけど、そこに行ったら、勉強ちゃんとやってる人、英語ちゃんと喋れる人、で、もともと英語が母国語の人、そういう人ばかりで、そこで、初めて挫折感が。

Q 留学生同士の中で、差がある人を見たんだ。

B そうです、で、それから選考とか書類で落とされたときは、ちょっとあれですね、なんでやろみたい。大学かな、みたい。

今までは、留学、大学進学など自分で計画し、その通りに希望をかなえてきた。しかし、多くの大学生がそうであるように、就職活動で「思い通りにいかない」という経験をする。不採用でもその理由は分からない。それまで気にしなかった大学のネームバリューを気にしたり、落ち込むことはあったが、それでも日本での就職活動をやめたいという気にはならなかった。卒業までに決まらなくても、ビザを延長してぎりぎりまで就職活動を続けようという揺るぎない意志のもと、転機が訪れる。

もともと、モノづくりが好きで、メーカーを希望していた。ところが4年生の秋に行った合同説明会で通関業務を行う企業を知る。資格も要りそうだし縁がなさそうだと感じたが、その会社が話す理念の「世界の架け橋になって」という言葉にピンとくるものを感じる。専攻が流通だったこともあり、この分野でも自分が関わっているのではないかと思う。その会社は留学生枠のようなものはなかったが、門戸を閉ざしているわけではなく、日本人と同じ採用試験を経て、内定を得ることになる。

最終面接で登場した社長は女性だった。Bさんはそこでも「働く女性像」というイメージを強く意識することとなる。

6. 考察

2人のライフストーリーから、本研究のテーマである進路決定の要因について考えてみたい。まず、2人とも就職活動を始める前に、アルバイトやインターンシップで働くイメージがある程度できていた。しかも肯定的なイメージを持つことによって、就職活動にとりかかることができ、なかなか内定がでないときも自分の意思が揺らぐことがなかったといえる。また、そのイメージだが、女性であるAさん、Bさんにとって、働く女性としてのモデルとなる存在があったことも大きかったといえる。Aさんは当初の希望ではなかったホテル業界で働く女性の存在が、最終的に進路選択の大きな要因となる。Bさんは日本女性と働くというイメージが結びついていなかったのが、アルバイト先で働く女性によって大きくイメージが転換し、働く女性と自分を結びつけるようなイメージを抱くようになる。そして、日本で就職するという強い意志は、ゼミの教員やキャリアサポートセンター（キャリアセンター）など頼れる存在のサポートを受けることで、揺らぐことなく貫かれた。本人の主体性と周囲と具体的なイメージ像という3つの要素が相まって、内定という目標を達成できたといえるのではないか。

7. おわりに

2人の進路決定に際し、日本語教員の役割はあげられていない。それでは、今後日本語教員は、学生の進路決定について何ができるのだろうか。日本語教員は3年生以上になり日本語授業がない留学生とは、関わる機会が減ってしまうことも多いのではないか。しかし、日本語授業が終わったらそれまでではなく、彼らの出口まで関わっていかうとすることも重要だろう。

基本的なこととして、的確な時期に進路に関する情報の提供を行うことは当然である。その上で、日本語教員は、様々なネットワークを構築し、連携体制を整えることが有効になってくるのではないだろうか。例えば、キャリアサポートセンター（キャリアセンター）との連携で、留学生に対する対応の仕方や留学生が抱えている問題などの情報提供も有用であろう。また、他の教員やあるいは他大学の日本語教員ともネットワークを拡充していくことによって、課題とその解決策を共有し、多様な経験の機会や場を創り出す工夫につながることもなろう。

日本語教員にとって、普段の授業が受身的な授業ではなく主体的に動ける活動を授業に取り入れる（学習 autonomy）ことで、学生の自律性を育てることが、学生の将来のためにいかに重要かというのはいま言うまでもない。

参考文献

- 釜淵優子 (2015) 「留学生の就職活動に寄り添うビジネス日本語コース構築の試み」
『関西学院大学日本語教育センター紀要』4号 29-39

- 久野弓枝 (2015) 「中国人編入留学生のライフストーリー研究 (1) —編入留学後の問題に着目して」『札幌大学総合論叢』第 39 号 63-73
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察 元留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究 第 3 部ナラティブ』11 308-327
- 佐藤正則・中山亜紀子 (2014) 「中国人女子学部留学生の留学動機と将来像」2014CAJLE Conference Proceedings 85-93
- 日本学生支援機構 (2015) 『平成 25 年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果』http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/d_ichiran.html
- 深川美帆・島 弘子・太田亨 (2014) 「ビジネス日本語講座修了生追跡調査：金沢大学におけるパイロットケース実践報告」『金沢大学留学生センター紀要』17 号 57-69
- 堀井恵子(2012)「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究 3—タイ・バンコクの日系企業などへのインタビューからの考察—」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』創刊号 31-46
- 堀井恵子 (2013) 「ビジネス日本語教育におけるシニアサポーターの活動の意義と課題」『武蔵野大学グローバル教育研究センター』第 2 号 77-87
- 三宅真由美 (2015) 「学部留学生に対する就職準備教育としてのビジネス日本語教育」『信州大学経済学論集』66 号 11-18
- 三代純平(2013)「ビジネス日本語教育における『文化』の問題—アジア人財資金構想プログラム以降の先行研究分析—」『徳山大学総合研究所紀要』No. 35 173-188
- 三代純平 (2014) 「『グローバル人材』になるということ—元留学生のライフストーリーから」第 34 回アカデミックジャパニーズ研究会発表資料
- やまだようこ (2000a) 『人生を物語る—生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2000b) 「展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か—」『教育学心理学年報』第 39 集
- Polkinghorne, D. (1995). Narrative configuration in qualitative analysis. *Qualitative Studies in Education*, 8, 5-23.

付記

本稿は、平成 25 年度科学研究費基盤研究 (C) 「ライフストーリーを用いた学部留学生の将来像の形成過程に関する研究」(研究課題番号 25370594) の助成を受けて行われたものである。